

「目立て」から始めるメゾチント体験教室

ミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクションでは、
モノクロームメゾチント技法を体験できる教室
を不定期で年に4~5回開催しています。
今回は「目立て」から始めるメゾチント体験。
メゾチントのヒロードのような黒の秘密を探り
ながら、「目立て」「製版」「刷り」を実践する
初心者向けの教室です。



次回開催日と、申込方法

「浜口陽三・丹阿弥丹波子 二人展 はるかな符号
大岡重紀の詩と共に」会期中は2回開催します。
(教室の内容はすべて同じです。)

講師：江本創(アーティスト)

日時：①4月26日(日) 14:00~17:00

②4月27日(月) 14:00~17:00

※②は、休館日の開催となりますが、展覧会をご覧いただけます。

参加費：入館料+2000円(材料費込み)

定員：各回10名

持ち物：下絵(サイズ5×5cm)、汚れても良い服装、またはエプロン

※通常の教室と下絵サイズが異なりますのでご注意ください。

2015.4.4sat - 6.30 tue
浜口陽三・
丹阿弥丹波子
二人展
はるかな符号
大岡重紀の詩と共に

3月17日(火)11:00から電話にて受付開始。(初めての方優先、定員になり次第終了)

ミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクション TEL:03-3665-0251

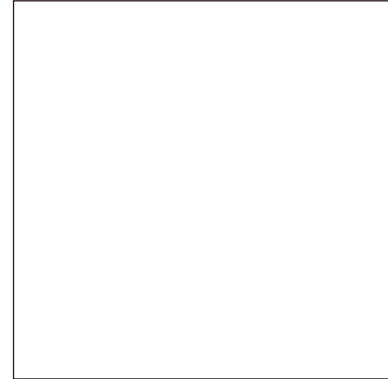
メゾチント体験教室Q&A

Q1. メゾチントってどんな技法？

A1. 銅版画の技法のひとつ。

ビロードのような画面が特徴です。

銅の板に施した凹部分にインクをつめ、凸部分の余分なインクはふき取って強い圧力で紙に刷るのが主な銅版画のしくみです。メゾチント技法では、最初に版全面に細かな傷(まくれ)をつけ、ビロードのような黒い画面をつくります。これを「目立て」といいます。明るく(白く)したい所は「スクレーパー」という道具でまくれを削りとり、インクが溜まる量を減らします。ぎざぎざのまくれがなだらかになるほど明るく(白く)なり、微妙な削り加減で美しいグラデーションの表現が可能です。えんぴつで黒くぬりつぶした画面に消しゴムで絵を描くようなイメージです。



下絵サイズ: 5×5cm

Q2. どんな下絵を用意したらいいの？

A2. 浜口陽三の作品を参考に見てみましょう。

左上:「猫」1937年

ドライポイント技法による作品。(今回の教室ではこの技法は使いません)銅の板に先のとがった針のような道具で引っ掻き、その傷にインクを詰めてから余分なインクをふき取り、紙に刷りあげます。引っかいた所が黒くなるので、「線」で描くのに向いた技法です。



左下:「巻貝」1959年

メゾチント技法による作品。(今回の教室で使う技法です)

暗い背景のから白い巻貝が浮かびあがります。

よくみると、線ではなく、黒の「濃淡」で描かれています。

貝のまるみを帯びた形、影、背景のグラデーションは、メゾチントの得意とする表現です。どちらかという「線」で描く表現には向きません。

